日本語アカデミック・ライティング支援者のための研修リソース開発

黒田史彦（東京都立大学）、大森優（神田外語大学）

Development of Training Resources for Practitioners of Japanese Academic Writing Support

Fumihiko KURODA, Tokyo Metropolitan University
Yu OMORI, Kanda University of International Studies

要旨：本研究の目的は、日本語によるアカデミック・ライティング支援を担う支援者のための研修リソースを開発することである。ベテラン支援者による模擬セッションの実践録画と振り返りから、ベテラン支援者が実践している支援のポイントを「パターン」として抽出する。そのパターンを実践録画にキャプションとして書き込み、パターンの検索機能を実装したうえで、支援者向けの研修において活用できるリソースとして一般公開する。

キーワード：日本語アカデミック・ライティング支援、支援者のための研修リソース、パターン・ランゲージ

1. 留学生向け日本語アカデミック・ライティング支援

日本の大学学部・大学院に在籍する留学生の多くは、日本語による学術的文章の作成を求められている。文章作成に臨む留学生（書き手）に対する学習支援の一環として、書き手と支援者が一対一で文章を検討する日本語アカデミック・ライティング支援（AWS）を提供する大学も増加している。

AWS の支援理念は大学によって異なるが、通底するのは「書き手主体」「文章を直すのではなく、書き手の成長を促す」「対話の重視」といった支援姿勢である（佐渡島・吉野 2008）。支援者は、文章のオーナーである書き手に多彩な質問を投げかけ、書き手自身が文章を見つめ直し、吟味するきっかけを与える。支援者は、書き手との対話を通して、より書き手の意思、意図を反映した文章内容と表現形式の実現を目指している。

2. AWS 支援者の育成

大学で開設されている AWS では、大学院生が支援者として実践を担当するケースが多い。大学院生の学業計画により、毎学期のようにメンバーが入れ替わるため、常に新しい支援者の採用が必要となる。AWS の支援理念や実践方法に関する知識も経験もない大学院生を支援者として迎え入れるには、まず新人研修が必要である。さらに、組織的に支援実践に関するノウハウを蓄積し、一層の質的向上を図るには、先輩支援者から実践上のポイントを継承していく研修機会も不可欠である。したがって、AWS における支援力の維持・強化に向けた継続的な支援者研修が極めて重要な意味を持つ。

しかし、ほとんどの大学では AWS の運営体制がさほど整備されておらず、予算や人員が限られている。特に１～２名程度の教職員で運営しているような AWS では、新人研修や支援者研修に割ける時間的余裕も人員的余裕もない。また、AWS の新規開設を模索している大学では、実践上の支援ノウハウに関する蓄積がなく、赤ペンチェック的な添削や校正しかイメージできない。小規模の AWS を運営したり、AWS を新たに立ち上げようとする場合、拠り所となる支援者向け研修リソースの開発と共有が大きな課題となる。

3. AWS 支援者のための研修リソースの開発

本研究では、AWS の新人研修および支援者研修における活用を視野に入れつつ、AWS 支援者による支援力の獲得・向上ための共用リソースの開発に取り組んでいる。まず AWS のベテラン支援者による模擬セッションの実践録画から、支援を成功に導く「パターン」を抽出する。そのパターンを実践録画の画面上に書き込み、支援者向けの各種研修において活用できるリソースとして公開する。

AWS に長く携わるベテラン実践者４名に協力を仰ぎ、留学生（研究協力者）７名を相手とした模擬セッションを計 15 回（含、オンライン実施５回）実践してもらい、その様子を録画した。模擬セッション後にその録画を筆者らと共に見直しながら、支援者に自らの実践を振り返ってもらった。実践中に考えたこと、感じたこと、言動の意図、狙いなどについて、支援者本人に解説してもらった。適宜、筆者らから質問し、支援者の意識的・無意識的な言動に対する内省と言語化を促した。

支援者の実践録画および振り返りにおいては、似たような言動や解説内容が繰り返し観察された。それらの言動や解説内容を、支援を成功に導く定石的な「パターン」として抽出・整理し、マニュアルのように個別具体的すぎず、掴みどころのないほどに抽象的すぎないパターン名を付与した。パターンの抽出から名づけに至る一連の取り組みにおいて、実践知の言語化と共有化を志向する「パターン・ランゲージ」の手法を援用した（野澤ほか 2018, 井庭・長井 2018, 黒田・大森 2021）。

AWS 支援者のための各パターンは、冒頭の【パターン名】に続いて、そのパターンが活用できる【状況】、その状況で起こりうる【問題】、その問題の【解決】のための行動例、解決してもたらされる望ましい【結果】から構成されている。

例えば、「答を持っているのは書き手」というパターンは、表１のようなストーリーにまとめて書き表すことができる。つまり、「答を持っているのは書き手」という【パターン名】の AWS 支援の実践ポイントは、文章について「何か良い修正案はないか、探している」という【状況】において活用できる。この状況においては、「支援者が一生懸命考える形になると、書き手が支援者に頼って答を待ってしまったり、支援者も何かいい答を出さなければと焦ってしまったりする」という【問題】が起こりがちである。この問題を【解決】するためには、「いつでも、答を持っているのは書き手本人だということ念頭に置き、支援者は落ち着いて答の引き出し役に徹する。問題点を切り分けて考える、大事な

文に下線を引く、使えそうな文型を示して中身を考えてもらうなど、考え方や整理の仕方を提案することで、書き手が答を見つけるサポートをする」といった行動が期待される。この解決に向けた行動をとると、「書き手自身も当事者意識を持って課題に取り組むようになり、書き手が本当に書きたかったことに沿った修正案を見つけることができる」という望ましい【結果】が得られる。

表 1：【パターン名】答を持っているのは書き手

【状況】何か良い修正案はないか、探している。

▼その状況において

【問題】支援者が一生懸命考える形になると、書き手が支援者に頼って答を待ってしまったり、支援者も何かいい答を出さなければと焦ってしまったりする。

▼そこで

【解決】いつでも、答を持っているのは書き手本人だということを念頭に置き、支援者は落ち着いて答の引き出し役に徹する。問題点を切り分けて考える、大切な文に下線を引く、使えそうな文型を示して中身を考えてもらうなど、考え方や整理の仕方を提案することで、書き手が答を見つけるサポートをする。

▼その結果

【結果】書き手自身も当事者意識を持って課題に取り組むようになり、書き手が本当に書きたかったことに沿った修正案を見つけることができる。

表 2：【パターン名】クイズ・タイム

【状況】書き手が考えているが、どう修正すべきか迷っている。

▼その状況において

【問題】支援者が答えてしまうと、書き手がせっかく持っているはずの知識が生かされない。

▼そこで

【解決】すぐに答を示すのではなく、ヒントを出してみる。例えば、「自動詞と他動詞ってありましたよね？」「ここが受身形だと、助詞は何になりましたっけ？」などクイズ形式で考えてもらったり、「トピックセンテンスって聞いたことありますか？」などと質問し、既有の知識がありそうであれば、それを共通言語として、その観点からの検討を促す。

▼その結果

【結果】書き手の中に既にあった知識や考えを呼び起こし、それを生かすことができる。「前に学習した“あれ”が、こういう時に活用できるのか」ということを書き手が理解し、次回以降は自分で修正できるようになる。また、普通に説明されるよりもインパクトがあり、記憶に残りやすくなる。共通言語を用いることで、説明や考え方がスムーズになると共に、書き手自身もどのような観点で考えればいいのかが分かる。

同様に、「クイズ・タイム」という AWS の支援パターンについて、表 2 に書き出してある。書き手が知っているはずの知識なのに、思い出せなかったり、文章作成に活用できていなかったりする状況では、問答形式で既有知識を活性化させ、実用レベルの知識としての定着を促すという支援実践上のポイントがまとめられている。

各パターン名は、実践録画の該当場面にキャプションとして書き込まれる。また、どのパターンがどこにあるのかを示す目次を作成し、動画データ内に盛り込むことにより、当該場面を容易に検索してパターン例を視聴できる。パターン表示および目次検索機能を備えた動画データをインターネット上に公開することにより、AWS の支援者向け研修において広く利用可能な研修リソースとなる。

具体的な活用方法としては、新人研修においては、初めて AWS に触れる新人が AWS の実践イメージやセッションのポイントを具体的に把握するのに役立つ。支援者研修においては、既に AWS に取り組んでいる支援者が、自らの実践を振り返り、自己分析するための手掛かりが得られる。また、支援者同士でお互いの実践を理念的・方法論的に検討する際の共通観点も得られる。

4. 今後の展開

現在、模擬セッションの実践録画と振り返りからパターンを抽出・整理し、動画データへ書き込む作業中である。すべての実践録画と振り返りに対して分析・作業が終わり、公開することができたら、AWS に携わる支援者向けの強力な研修リソースとなるだろう。

AWS 支援者のためのパターンおよびパターン名の妥当性、適切性、汎用性の検証、パターン相互の関係整理や体系づけ、オンサイト実践とオンライン実践におけるパターンの比較分析、新人研修や支援者研修における試用実験などは、すべて今後の課題である。

付記

本研究は JSPS 科研費 19K00742 による成果の一部である。

参考文献

井庭崇・長井雅史. 2018.『対話のことば：オープンダイアローグに学ぶ問題解決のための対話の心得』東京: 丸善出版.

黒田史彦・大森優. 2021.「日本語アカデミック・ライティング支援のためのパターン・ランゲージに関する探索的研究」,『日本語教育方法研究会誌』, Vol.27, No.1, 98-99.

佐渡島紗織・吉野亜矢子. 2008.『これから研究を書く人のためのガイドブック』, 東京: ひつじ書房.

野澤祥子・井庭崇・天野美和子・若林陽子・宮田まり子・秋田喜代美. 2018.「保育者の実践知を可視化・共有化する方法としての『パターン・ランゲージ』の可能性」,『東京大学大学院教育学研究科紀要』, Vol.57, 419-449.